

## 絆 求 め て

10月2日発行

文責 幼児教育専門員 久保田学



## 現職教員研修①を実施しました！

令和7年8月30日(土)、長野県立大学 健康発達学部 こども学科教授 前田 泰弘先生、信州大学教育学部附属幼稚園 教頭 鈴木 崇晃先生を講師としてお迎えし、現職教員研修①をWEBで実施しました。前田先生には「特性のある幼児の理解と支援」、鈴木先生には「園小接続の重要性と現場での対応について」、ご講義いただきました。以下に研修後のレポートでお書きいただいた内容を紹介します。

## ＜前田先生の講義から学んだこと、今後の保育実践に生かしたいこと＞

- 実際に私のクラスにいる、落ち着きのない子や、悪気がなくお友達に手を出してしまう子どもの姿を思い浮かべながらお話を聞いていました。私自身が「行為をやめさせなきゃ」という考えていたので、その子どもが「何故やってしまうのか」という考えが無かったことに気がつきました。子どもの行動の背景にある事柄や気持ちに気づいて、発達評価をしていき、一人一人に寄り添った言葉がけや対応、援助ができるようにしていきたいと思いました。気になる行動の背景から、保育環境の整備や、伝え方の工夫をし、子どもが生活しやすくなるよう今後関わっていきたいです。
- 自己原因性感覚について学んだ。子どもが暴力を振ったり、物を壊したりするのは、「自分の存在を認めてほしい」という自己存在性の訴えであることが分かった。また、外界に変化をもたらせるという「自己原因性の訴え」であったりすることもわかった。今まで自分の私物を蹴る・壊す、友だちを蹴る等の行為をする子がおり、対応に悩んでいた。注意ばかりしてしまっていたが、何か少しでも変化を起こしたい気持ちの背景には周りから否定されていたり拒否されていたりする事もあると講義を受講し、気付くことができた。そのため、今後もそのような行動をする子がいるかもしれないが、その場合は注意する前に「訴えがあるかもしれない」「なにか欲求があるかもしれない」等、その子の行動の背景をよく考えて接していきたいと思う。

## ＜鈴木先生の講義から学んだこと、今後の保育実践に生かしたいこと＞

- 「遊び」の中でも自己選択、自己決定、自己実現ができる活動を通して主体性が確立できると学んだ。しかし、保育者は子どものしたいようにさせて何も働きかけないのではなく、子どもの興味関心に応じて環境を構成することが大切だと知った。また、就学前までに教師主導で一方的にできることを増やすのではなく、子どもの体験や他者との関わりなど生活の中での子どもの学びが小学校以降の教育の基礎になることを学んだ。そして、長野県内の実践を知り、年長から小学校一年生への連携だけでなく、園小全職員で理解することや、幼稚園、小学校、中学校など12年間を通じて育みたい姿や子どもたちのよさを見つけられると学んだ。今は卒園した子どもたちとの関わりは少ないが、園と学校で活動を考えたり、お互いの姿を見合ったり、関わりが増えるといいなと感じた。
- 子どもの主体性について大切ということは何度も研修をする中で学ぶ機会がありましたが、今回の研修でまた改めて考えることができました。私は未満児の担任をしていますが、普段必要以上に子どもに援助をしてしまっているような気がします。主体性を育てるには環境を通した子ども中心の保育が大切で幼児が自ら周囲に働きかけ幼児なりに試行錯誤を繰り返す自らの発達に必要なものを獲得しようとするようになることなので、私の関わり方によってその機会を奪ってしまわないように子どもと接していきたいと思いました。子どもが自らしたいことやできるようになりたいという願いをもち頑張れるように導いていけるような保育がしたいです。子どもと日々過ごす中で信頼関係を築き、その上で子どもが一人ではできそうでできないことや、やりたいことを観察しその為に自分が何が出来るか何をしてあげることが良いのかを考え接していけるようにしたいです。

園を訪問する中で、園小接続については、「連携」で終わっていて「接続」にはなっていないとの声が聞かれます。接続に対する園と小の温度差、目的意識の違いがあると感じます。やはり大切なのは、形式的なつながりではなく、幼児期の終わりまでにつけたい10の姿を大切に、子どもの育ちをつなげていくという意識ではないかと思います。(専門員)